

名瓜稱

ふほどに、女のかほをうちみて、くちより露ばかりのものをおとしをくやうにして、とびていぬ、女なに、かあらんすゞめのおとしていぬる物はとて、よりてみれば、ひさごのたねをたゞひとつおとしてをきたり、もてきたる様こそあらめとて、とりてもちたり、あるいはみじすゞめの物えて寶にし給とて、子どもわらへば、さばれ植てみんとて、うへたれは、秋になるまゝに、いみじくおほくおいひろごりて、なべての杓にもにす、大におほく成たり、女悦けうじて、さと隣の人にもくはせ、とれどもくつきもせずおほかり、わらひし子孫もこれをあけくれ食てあり、一里くばりなどして、はてにはまことにすぐれて大なる七八は、ひさごにせんと思って、内につりつけておきたり、さて月比へて、いまはよく成ぬらんとて見れば、よくなりにけり、とりおろしてくちあけんとするに、すこしおもし、あやしけれどもきりあけてみれば、物ひとはた入り、なに、かあらんとて、うつしてみれば、白米の入たる也、思がけずあさましとおもひて、大なる物にみなをうつしたるに、おなじやうに入てあれば、たゞごとにあらざりけり、すゞめのしたるにこそと、あさましくうれしければ、物にいれてかくしおきて、のこりの杓どもをみれば、おなじやうに入てあり、これをうつし／＼つかへば、せんかたなく多かり、さてまことにたのもしき人にぞ成にける、となり里の人も見あざみ、いみじきことにうらやみけり、

〔眞本新撰字鏡〕草 茄七 二形同古 胡反影胡 同瓜 一 瓜 二形作古 平葉 也食子

〔新撰字鏡〕草 茄利

〔倭名類聚抄十七〕瓜 唐韻云、瓣音辨、和名、字瓜瓠瓣也。

〔伊呂波字類抄〕植物附植物具 瓜 ウリ 低廣雅云龍蹄獸掌羊胫兔頭桂 瓠 瓠 蔔已上 瓢ウリノサネ、瓜  
實也 白瓜子ウリノサネ、蘇散注 甘 也 水芝 瓠子 出崔禹 甘瓜子出崔禹 鬼延白瓜辨也、出三神  
六名ウリノサネ 見本草ウリノサネ 瓣ウリノサネ